

コミュニティの基盤としての民俗芸能に関する研究 —つくば市小田祇園祭を事例に

Study on Folk Cultural Heritage as a Basis of Communities
—A Case Study of the Oda Gion Festival of Tsukuba City

駒形 春佳
KOMAGATA Haruka

1. 研究の背景と目的

もとは地域住民の宗教・娯楽活動であった民俗芸能だが、過疎化あるいは都市化などによるコミュニティの変容・崩壊という今日の状況で、祭りなどの民俗芸能の持つ地域のつながりを強化する機能が注目されている¹。しかしその一方で、そうしたコミュニティの変容・崩壊が、民俗芸能そのものの活動を変化させまた存続をむずかしくさせている²。本研究の対象であるつくば市小田の「小田祇園祭」に登場する「大獅子」は江戸時代以降受け継がれてきたが、1964年には担い手不足で一度途絶え、地域の伝統を絶やすまいとした若者たちにより1976年に復活した経緯がある。その後担い手や形式を変えながら受け継がれ、現在も運営活動や資金運用などがすべて地元小田住民の手で行われている。しかし一般的に広く価値が認められる文化財指定などもされていないため、研究はまだ少ない^{注1}。

本研究は民俗芸能の保存とその地域コミュニティとの関係に注目し、「小田祇園祭」を事例に民俗芸能の保存の在り方について考察することを目的としている。民俗芸能の研究は、一時点で見るのではなく、その社会が生んだかつての姿と今後変化していく姿の正しい記録・分析が求められている³。本研究では特に担い手に着目してその変遷や現状及び課題を明らかにすることとした。

2. 研究の方法

小田中部地区および中部地区内「小田大獅子保存会(以下、保存会)」を対象に、以下5点を把握した。

- ①祭礼の背景(地区の概要・歴史等)の把握
- ②祭礼の運営活動(準備・当日の作業工程等)の把握
- ③祭礼の担い手と形式の変遷
- ④祭礼を支えている地域組織の概要と関わり方
- ⑤保存会員および非会員の祭礼に対する態度(調査概要は表1参照)。

調査方法は、文献調査(①) 参与観察記録(②)

ヒアリング調査(③④⑤)である。

表1 「保存会会員非会員の祭礼への関わり方」調査概要

調査日	2013年12月1日	2013年10月～12月 計6日間
調査対象	「小田大獅子保存会」会員	会員以外的小田中部住民
調査項目	Q1: 保存会への参加歴、居住地、出身地、年齢 Q2: 保存会への参加動機 Q3: 祇園祭の魅力な点 Q4: 活動の良さ・大変さ Q5: 担い手の現状 Q6: 今後の展望	Q1: 年齢、参加の有無 Q2: 祇園祭の印象(魅力) Q3: 担い手・保存会について Q4: 今後の展望



図1 小田地区

3. 小田地区および小田祇園祭の概要

(1) 小田地区の概要と歴史

筑波山麓の一地区であるつくば市小田地区は、中世に地方豪族小田氏の居城「小田城」(国指定史跡)の城下町として発展した時代に形成された⁴。現在でも城下町に関連した地名や堀跡等が残る他、鎌倉時代の石造物や仏教美術品など多くの文化財も点在して

いる。1950 年頃までは地区の大半が農家であり青年層も多くいたが、その後産業の変化とともに若者が勤めに出るようになってからは人口減・高齢化が進んできた。現在小田は東部・中部・西部に分かれ(図 1)、それぞれの地区に役員会などの組織があるが、かつて地域で盛んに行われた農業に関連した年中行事は少なくなり、住民同士の結びつきは希薄になった。一方近年では地元 NPO による地区内の山(宝篋山)のハイキングコース整備や、使われなくなった古民家の活用など新しいまちづくり活動も行われている。

(2) 小田祇園祭の概要

小田祇園祭は、小田八坂神社の例祭で毎年 7 月第三土曜日(かつては二十日盆(7 月 20 日))に行われる。中部が獅子巡幸・東部が神輿巡幸を行い、20 時から地区の境界線である八坂神社前にてぶつかり合う。神輿をササノオ、獅子をヤマタノオロチに見立てたとされるぶつかり合いの後、神輿は八坂神社へ還御し獅子はその場で解体される。獅子は体長 15m 程のものを竹の棒を使って高さ 3m まで持ち上げ、数十人で激しく舞わせる。無病息災を願う男性中心の荒々しい祭りで、神輿の起源は享保期、獅子の起源は慶応期に遡る⁵。

(3) 小田祇園祭の運営活動

獅子巡幸を担当する中部では、準備は保存会だけが関わっており 5 月～7 月の 2 か月をかけて行われる。大獅子は毎年獅子頭を残して解体されるため、そのつど材料採取・製作をする必要があり、これが準備の中心となる。モク(結城市内の田川にて採取する水草の一種)取り^{注 2}・獅子の胴体製作^{注 3}・その他用具の製作準備という工程を経て大獅子が完成し祭礼を迎える。祭り当日は中部役員会^{注 4}が地区内にテントを設置・寄付をもらう。大獅子巡幸には、保存会・中部役員会・地区の当番^{注 5}に加え、筑波大生や保存会会員の知り合いなど外部から担ぎ手として参加する者もいる。地域の人口が減り高齢化している中で、2010 年頃よりこうした外部からの担ぎ手の数は増えている。当日は大獅子巡幸の他、保存会による中部全戸(220 軒)の「お祓い」・中部小学生の集まりである子供会(保存会とは無関係)による「子獅子巡幸」も行われる。また当日は中部地区にて、祭とは関係なく地元 NPO が古民家を活用したカフェ運営やイベント開催を行っている。



写真 1 大獅子 (2013 年 7 月 20 日撮影)

4. 小田祇園祭における担い手の変遷

保存会以前(1955 年頃まで)、保存会設立当初(1979 年頃)、現在(2013 年)に分けて祭りの担い手を整理した。大獅子巡幸はかつて青年会が中心であったが、地区の産業が一次産業から三次産業へと変化し若者が勤めに出るようになると、担い手不足で大獅子巡幸は一度中止となった。しかし 1979 年に地元消防団の若者が中心となり保存会を設立し大獅子を復活させてからは、担い手に合わせて日時や形式を変化(獅子を軽量化、祭りの終了時間を 22 時に早める等)させながらも、中部全体で祭りが続けられてきた。保存会会員でなくても、青年層が担ぎ手として参加する、小学生の父母が子供神輿の準備を行う、当日は役員会・当番の奥さんが担ぎ手に夕食を手作りする等の関わりがあった。しかし現在ではこうした習慣は途絶えつつあり、保存会設立当初よりも会活動に参加する住民が減少している。準備活動は保存会だけが行っており、外部からの当日のみの参加者は増えるものの、当日においての会員以外の小田地区住民の関わりは少なくなっている^{注 6}(図 2)。

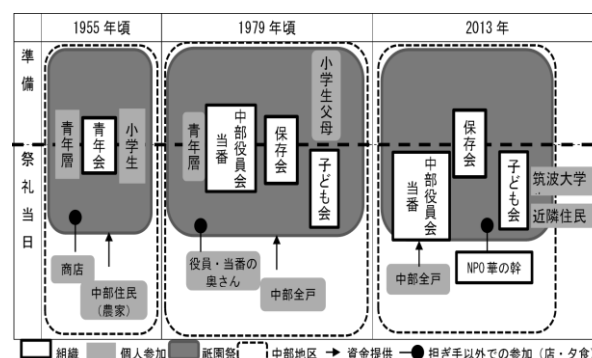


図 2 中部における小田祇園祭担い手の変遷

5. 保存会会員・非会員の祭礼に対する態度

(1) 会員

①保存会への参加歴、居住地、出身地、年齢

会員の年齢構成は 30～40 代が過半数を占めているが、10～60 代までで構成されており、13 名中 11 名が生まれた時から中部に住んでいる(図 3)。保存会の入会時の年齢にはばらつきがあった。

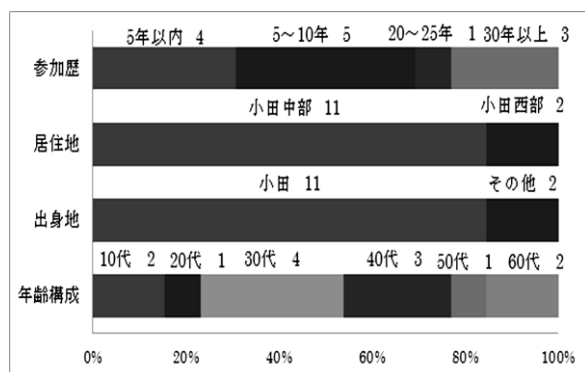


図 3 保存会会員の基本情報

②保存会参加の動機

参加動機は、「会員からの紹介」が 13 名中 10 名である。現在 20 代以下の若い会員はいずれも保存会に親も参加している。会員との繋がりが入会の契機になっていることがうかがえる。さらに動機について、「祭りが好きで昔から見ていた」(4 名)の他、「つながりが欲しかった」(2 名)もあった。会活動が地域内での繋がりを求める場として認識されていることがうかがえる。

③小田祇園祭の魅力(複数回答可)

小田祇園祭・小田獅子の魅力は、「伝統」(2 名)よりも、「他には無いものである」(7 名)が多く、いずれも 40 代以下の会員の意見であった。「他には無い」と感じる点として「毎年手作りする」「神輿との顔合わせ」などがあった(図 4)。

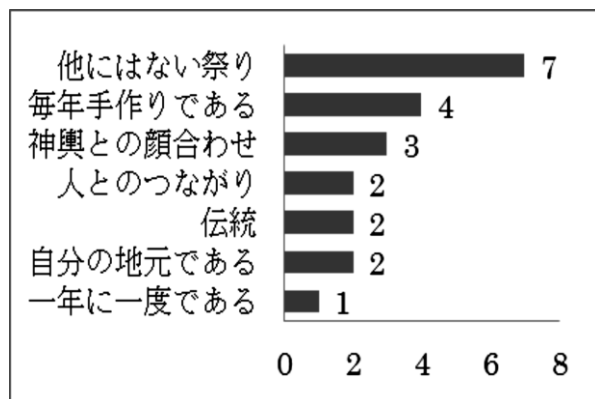


図 4 小田祇園・小田獅子の魅力

④会活動の良さ・大変さ(複数回答可)

会活動の良さとして「地域でのつながり」(4 名)と「祭りでの高揚感や達成感」(4 名)が最多であった(図 5)。保存会員の間で、日常もしくは緊急時に連絡し合うなど、保存会内では祭礼だけでなく日常のコミュニティが形成されているといえる。また「お祓いの時に中部全戸と交流できる」(2 名)をあげたのは 50 代 60 代の会員である。会活動の負担として、「準備活動」をあげる人が最多である(図 6)。準備のため「夏は祭りメインになり休日が取れない」、「モク取り」、「獅子製作」が多い。会員は準備を負担と認識している。

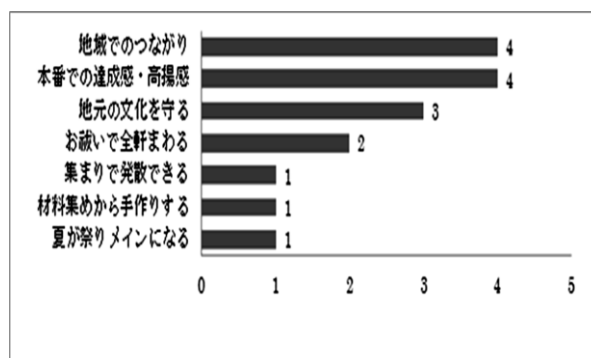


図 5 会活動の良さ

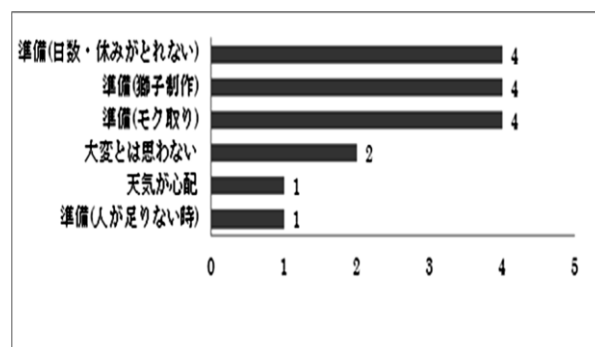


図 6 会活動の負担

⑤担い手の現状について

担ぎ手に小田地域外の人が増えている現状については、「参加を歓迎する」(4 名)と「地元の人を増やしたい」(4 名)が同数であった。また外部の参加者が増えることで小田住民が祭りから離れてしまうことを危惧し外部化を一概に良いとは思わないが、続けていく上で「やむをえない」(2 名)とする意見もあった(図 7)。

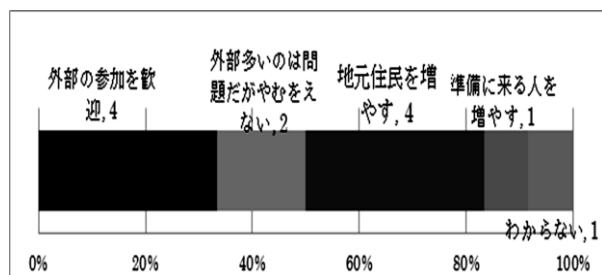


図7 現状についての認識

⑥今後の展望(複数回答可)

今後の展望については、「若手・子どもの参加」を挙げる人が13名中11名であった(図8)。具体的には、「地元の若い世代」(4名)「地元の小中学生」(2名)「地元の中高校生」(2名)「会員の子供」(3名)であった(図9)。「小田祇園祭は、地区の小中学生で獅子や子ども神輿がやるが、それ以降中学生になると祭りに参加する場がなくなり、祭りから離れがちになる。その点を改善し、祭りに参加した子が自然に保存会へ興味を持ち参加しやすくできる体制を作りたい」(4名)という意見があった。

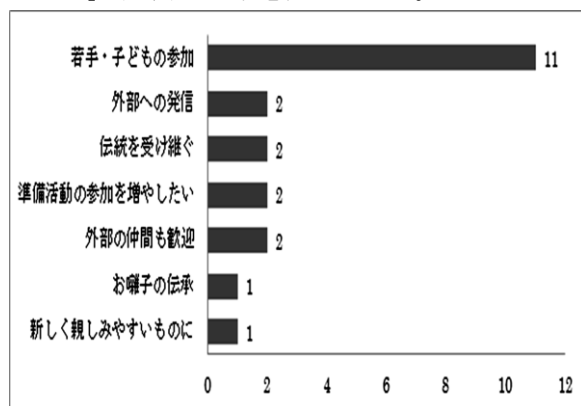


図8 今後の展望

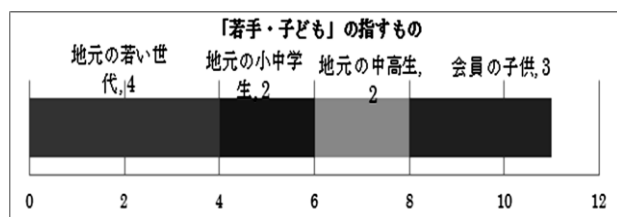


図9 若手・子供の指すもの

(2) 非会員

街頭にて対応してもらった中部地区住民35名に対してヒアリング調査を実施した。年齢構成は、10代1名・30代6名・40代3名・50代3名・60代11名・70代9名・80代2名となっている。男女別では男性15名、女性20名である。(図10)

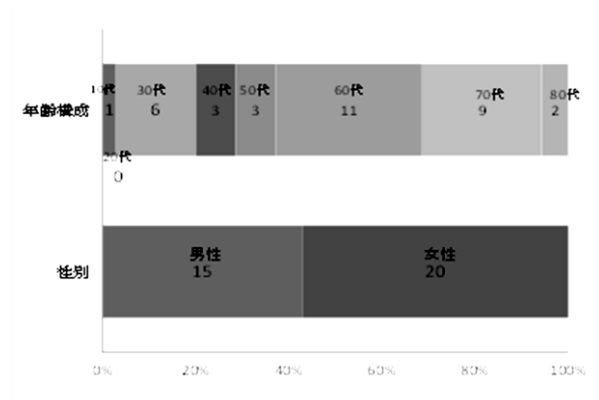


図10 回答者の年齢構成・性別

①祭りへの参加の有無

35名のうち全員が小田祇園祭のことを知っており、1度は見物・参加したことがあった。「毎年見ている」という声が10名あった。獅子が地区を練り歩き、また全戸を御払いするため、小田祇園祭は地域に広く認識されている。しかし参加の諸相は様々で、現在は必ずしも毎年全員が見ているとは限らない。

②祇園祭の印象(魅力)

「とても好きである」(14名)、「まあまあ好きである」(5名)と合わせると35名中19名が肯定的であった(図11)。「どちらともいえない」には、その内容としては「(特別な魅力があるというよりは)毎年やっている地元の祭り」(4名)、「かつては良かった」(4名)「知らなかった」(3名)があった。「知らなかった」としたのが、出身地が小田以外の30代女性であった。若い世帯が祇園祭に参加しないことによって、域外出身者は地区内に住んでいても、そもそも祭りを知る機会を失っていることも考えられる。また「とても好きである」「まあまあ好きである」とした人に、どの点を魅力と感じるか聞いた(図12)。魅力である点は「獅子」が19名中10名で最多であった。

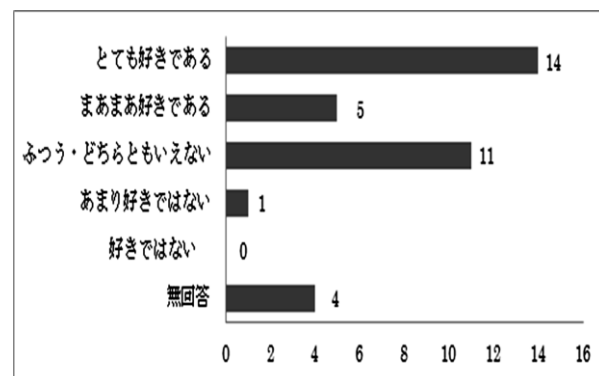


図11 祇園祭の印象

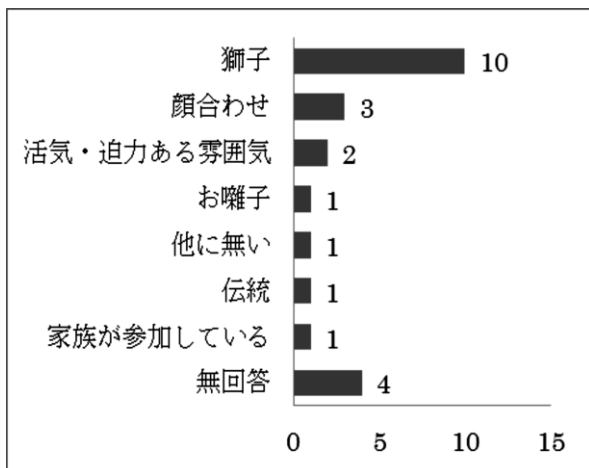


図 12 魅力である点

③担い手・保存会について

35 名中 16 名が保存会に対して肯定的である。「保存会がやるもの」(3 名)「保存について考えたことがなかった」(3 名)「(筑波大生など) 外部の人が来るので大丈夫」(4 名)など、自身を祭りの担い手とは捉えていない傾向が強い。また「地元の子どもが減少している」(4 名)という意見もあった(図 13)。

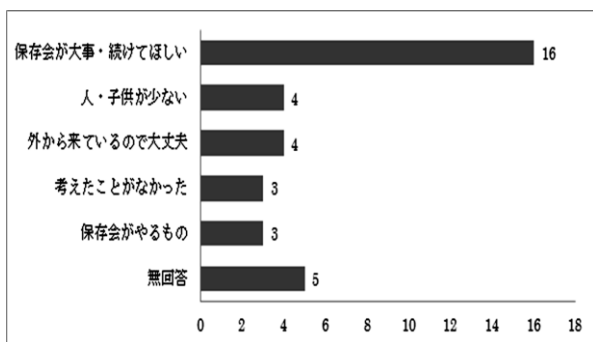


図 13 担い手・保存会についての認識

④今後の展望

今後の展望について(図 14)、「無回答」(4 名)と「保存活動は大変そう」(4 名)を除くと、35 名中 27 名が何らかの改善案を示しており、祭りの継続を望んでいる。しかしその担い手を「外からの支援」(7 名)「地元の若い人・子供の参加」(4 名)「保存会を残す」(4 名)などとしており、祭りの担い手は自身ではなく保存会等他者が行うべきものという認識がうかがえた。

その他の意見として、「祭りに行けばお金もらえる・お酒飲めるなど、楽しみがあると良い。」(70 代男性)、「地区で催し物をどんどんやってほしい」(60 代女性)「いろいろな人が参加して楽しいお祭りにしていけばよい。」(10 代男性)、「駐車場をつくるなど人を呼ぶための整備が必要」(30 代男性)、「(つくば

市の)ケーブルテレビで流してもらう」(30 代男性)、など祭の魅力向上に関する方策や「地域に若者が少なくなっているので、若者をひきとめる事が出来ればよい」(60 代男性 区長)といった地域全体の課題を述べる意見がある一方、「保存会を残すために区費からお金を出すべき」(40 代男性)といった祭りを保存会に依存するような意見もあった。

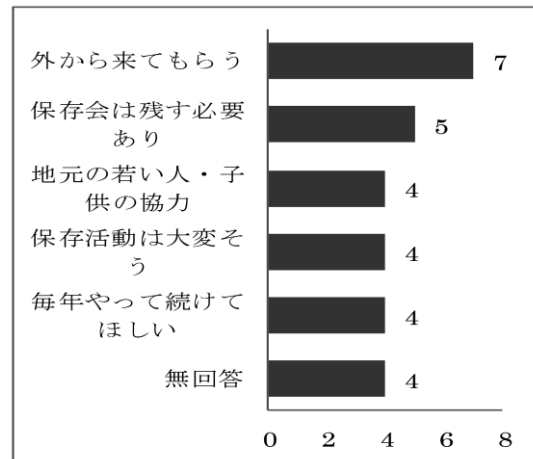


図 14 今後の展望 (複数名の回答のみ)

(3) 保存会会員と非会員の祭に対する態度の差異

祭りの魅力に関しては、会員・非会員ともに特徴である獅子の存在が大きいいといえる。しかし、会員が挙げている「手作りである」ことは、非会員は魅力にあげておらず、その点で認識に違いがある。

また、今後の担い手について会員は地域住民の参加を望んでおり、これは準備負担の軽減だけでなく地域における繋がりや保存への意識の共有を求めている可能性も考えられる。このことは、外部からの参加者の受け入れに消極的な意見があることからもうかがえる。しかし、非会員は準備負担などもあり、祭りの運営と自身を結び付けて考えておらず、特に保存会に依存してしまっているといえる。

6. まとめ

以上より、祇園祭は地域社会の産業など社会構造の変化により、担い手が変化してきたことが明らかになった。これは地元住民の人口減・高齢化やお互いのつながりが希薄になってきたためといえる。一度中断となるも、若者を中心に地域が広く関わり運営してきた祇園祭・小田大獅子だが、現状では祭りの運営は保存会によるところが大きい。

現在会員は地域住民の参加を望んでおり、これは準備負担の軽減だけでなく地域における繋がりや保存への意識の共有を求めている可能性も考えられる。

非会員である地域住民は、祭りの継続を望む声が多いものの、準備負担などもあり祭りの運営と自身を結び付けて考えておらず、保存会等他者に依存してしまっている。また現在では保存会非会員は、祭り運営の活動を通じて地域内での様々な繋がりを構築できる、また準備の負担に見合った価値があることを見出していないといえる。

したがって、今後は地域内の様々な住民・団体と協働で祭りを運営していくための仕組みづくりが求められる。それによって、準備や運営活動に直接関わっていくことのもつ価値、つまり毎年自分たちの手で作りあげることによる獅子の価値や、コミュニティの基盤としての祭りの価値を、地域で広く共有することが可能になるといえる。そのためにはまず祭りに直接かかわる組織だけでなく、小田地域全体を対象に活動しているまちづくり団体との連携から始めていくことも有効と考えられる。こうした連携を通して、ヒアリングで明らかになった今後への改善点(会員・非会員間の情報共有、子ども・若い世代との交流、準備活動の参加を増やす等)への対応にもつながるのではないだろうか。

祭りは年に一度子どもからお年寄りまで、地域で普段は交流のない人々が時間や楽しみを共有し、自分も地域の一員であることを実感することができる貴重な機会である。小田においても同様で、時代と共に人の価値観や行動が個別化しつつある今日、こうした機会は以前に増して得がたいものになっている。ひとりひとりが改めてその価値を見つめ、人の暮らしやコミュニティの形が変わっても、祭りが伝えてきた、地域で人が共に祈り共に生きる心が変わることのないよう願っている。

参考文献

- 1) 澁谷美紀(2000)「伝統行事の伝承と地域活性化―岩手県北上市SN集落の小正月行事の事例を中心に―」村落社会研究 6(2) pp48-59
- 2) 星野紘 「世界遺産時代の村の踊り―無形の文化財を伝え遺す」雄山閣 pp14-42 2007
- 3) 植木行宣(監修)鹿谷勲、長谷川嘉和、樋口昭(編):「民俗文化財 保護行政の現場から」岩田書院 pp30-47 2007
- 4) アースデイつくば実行委員会編「歩いて発見! 小田マップ」つくば市 2011
- 5) 茨城県教育委員会「茨城県の民俗芸能-茨城県民俗芸能緊急調査報告書-」茨城県 pp70-71 1996

注

注¹ 以下のみであった。

・徳丸亜木・前川智子「祇園際に見る境界の概念―つくば市小田の祇園祭礼と行方市麻生八坂神社馬出し祇園の比較から―」『筑波山から学ぶ』筑波大学人文社会系 筑波山ルネサンス pp34-48 2013

・茨城県教育委員会「茨城県の民俗芸能-茨城県民俗芸能緊急調査報告書-」茨城県 pp70-71 1996

注² 「モク」は正式にはエビモという種の清流に生える水草で、小田祇園祭では神聖視され重要なものである。乾燥させたものを獅子の髪として使用する他に、厄除けのお守りとして中部全戸に配布する。

注³ 小田宝篋山で採取した竹を、火であぶって曲げ、ロープで立体的な形に組み合わせていく。

注⁴ 地区の男性住民は交代で役員の仕事をする。小田中部は地区内を「田向」「鍛冶屋敷」「荒宿」「中部」に分け、3年ごとに交代し役員会を結成する。祇園祭が一番大きな仕事で、その他年中行事の手伝い、地区の掃除や草刈など事を行う。役員は男性であり、女性の集まりは特にない。

注⁵ 中部地区内で祇園祭当日に獅子を担ぐ当番がある。これは中部地区を役員会の区分けとはまた別に3つに分け、毎年交代でその地区の男性が獅子巡幸に参加する。なお、神社の氏子会とは関係がない。役員会とともに年配男性が多い。

注⁶ 任意で獅子の担ぎ手に食べ物を提供する家もあったが、ほとんどがお祓いでの費用の奉納と大獅子の見物客としての関わりのみであった。